海外研修における社会観察･体験学習の指導プラン

― 社会科教育への一つの提案 ―

田岡　文夫・上西　好悦・池本　淳子

（ 京都教育大学 ）　（ 同附属京都中学校 ）（ 同附属京都小学校 ）

A Guiding Plan for Learning by Social Observation and Experience in a Study Tour Abroad

― A Proposition to Social Studies Education ―

Fumio Taoka, Kouetsu Uenishi, Junko Ikemoto

（Kyoto University of Education）（Attached Kyoto Junior High School）（Attached Kyoto Primary School）

2009 年 11 月 30 日受理

抄録：近年、中高生を中心に海外研修に引率する機会が増加している。本来の目的ではないが、これら海外研修に常にともなうのが、海外都市における中心地、繁華街の散策、買い物、あるいは公共交通機関、宿泊施設の利用等である。本稿では、われわれの経験と考察にもとづき、社会科教育への一つの提案として、こうした機会の社会観察・体験学習への利用の可能性と意義を検討した。さらにその実施には、生徒に具体的に何をどのように観察・体験させるかが問題となるが、その際の指導プランの例示を試みた。

キーワード：海外研修、観察・体験学習、社会科教育

Ⅰ．はじめに

近年、中学校、高等学校において、学校行事として生徒を海外研修に引率するケースが増加している。修学旅行先が海外に設定されるケースの増加はかなり以前から伝えられている。それにとどまらず、語学研修を目的として、あるいは海外提携校との生徒間交流を目的として、また音楽・美術等の芸術鑑賞、スポーツ交流･観戦その他、主旨、形態は様々である。[注 1)]

これらに常にともなうのが、海外の都市、市街での見学機会である。海外渡航の目的地、その近辺の著名な都市の中心部、繁華街を見物したり、買い物を目的に散策する機会は多い。また空港における出入国手続き、現地での地下鉄、バス等の公共交通機関利用にともなう時間や体験もある。時間にして、これらが海外研修のための渡航の行程全体に占める割合は決して少なくない。また生徒にとり、場合によっては引率の教員にとっても、これらが本来の目的以上に大きな期待、楽しい記憶となることも少なくない。たしかに海外では、誰れしも国内でのそうした経験をはるかに上まわる強い印象、新鮮な刺激を受ける。

こうした機会の増加にともない、著者ら自身が実感し、また他から求める声を聴くのは、引率教員も含め生徒のこのような海外研修における経験を、社会観察･体験学習として企画化、プログラム化することでさらに内容豊かなものにすることができないかということである。海外研修にはふつう本来の目的が一方にあって、それとは別に付随的な部分としてこうした楽しい見物、見学がある。この付随的な部分についてまで詳細に研修プログラム化する必要はない、おおらかに楽しめばよいという考え方もあろう。それはそれでよいと思う。しかし著者らは海外研修のこうしたプログラム化の可能性と方法は、一度検討してみるに値すると考えたのである。

その理由は、第一にこれをきわめて優れた教育機会、学習機会であると考えたことである。ただ散策し、ただ目にするだけでも生徒の心に強い刺激、新鮮な驚きを与える異国の街並み、たたずまい、それらにはより積極的に、意図的に働きかけることで、楽しい印象や記憶を超えるものが得られるに違いないと考えるからである。そうであれば、方法次第でこうした社会観察･体験学習はむしろ生徒の海外研修の本来の目的として設定することさえ可能ではないだろうか。それが第二の理由であり、とくに社会科学習の一環として応用することの可能性を

考えるからである。そのためには学習・指導のプラン作成の可能性や有効性を明らかにしなければならない。本稿の意図はこれを行うことである。また、国内でのそれに比べて、海外研修では要する費用、時間、労力は格段に大きくなる。それに値する成果を得ようとする姿勢を当然と考えるのが第三の理由である。

著者らはそれぞれ何らかの形で社会科教育の現場に立つ者であるが、かならずしも社会科教育の十分な研究基盤を持つものではない。本稿はそうしたわれわれが、教育現場での実体験にもとづく関心、問題意識を出発点に、まず一人一人が考え、そのうえで三人で議論することで論点整理を行い、社会科教育への一つの仮説的提案を行うものである。社会科教育研究における概念規定、論理的枠組が踏まえられていない点もあろう。また当該テーマに関する先行研究も踏まえられていない。むしろそれらは社会科教育の専門家に委ねるべきかもしれないが、われわれは本稿をまとめることで、これを出発点に、それらを拡充してゆくことを今後の課題と考えている。

Ⅱ. 問題の所在

1. 海外研修の目的行事

海外研修の行事予定を、まず二つに分類しておきたい。一つは海外研修が実施される際、引率教員、参加生徒いずれにもごく自然に本来の目的と理解されている部分である。第一目的だけでなく、第二、第三の目的であっても、事前に主要目的の一つとして認識され、予定されるものはこれに含めてよい。これらを目的行事と呼ぶことにする。いま一つは、海外研修の予定、日程に入り、時間配分もなされ、楽しみに期待されているが、あくまでも付随的と見なされる部分である。ふつう、研修、学習を意図した企画の対象とされることのない部分であり、これらを付属予定と呼ぶことにする。本稿のねらいは、後者のこれまで付属予定と見られ、扱われてきた部分について、社会科教育における観察、体験学習の対象として企画、立案の可能性と方法を検討することである。

目的行事と付属予定はかならずしも截然と分類できるわけではない。ある目的行事が、別の海外研修機会には、目的行事からはずれて単なる付属予定になることもあろう。しかし本稿での議論の必要上、両者の区別はできるだけ明瞭にしておきたい。若干便宜的にはなるが、両者の具体例をあげることでそれを示しておく。まず目的行事とされることが多いものとして次のような候補があげられる。

1．海外提携校等での生徒間交流
2．海外提携校等での語学研修
3．博物館、美術館等での展示の鑑賞、見学
4．劇場、ホール等での演奏、公演の鑑賞
5．競技場、体育館等での競技、演技の観戦、見学
6．史跡、名勝等の見学
7．施設、工場等の見学

これら以外にもあろうかと思う。要するにこうした類いのものと理解されたい。また以上のいずれかが単独で目的行事となることはむしろ少ない。いくつかの組み合せが目的行事として設定されることが多いと思う。

以上の目的行事の候補については、目的、意図が具体的で明瞭であるため、事前の準備とその指導のために何をすべきかが比較的はっきりしているというという共通点がある。唐突ではあるが、たとえばルーブル美術館で鑑賞研修を行うとすれば、次のようなことになろう。ミロのヴィーナスはじめ主要展示品リスト、それらの美術的評価、鑑賞上の留意点、展示品全体の傾向と特徴、あるいはルーブル美術館の来歴、世界的評価等々に関する予備知識が必要でもあり、有効でもあることは自明である。したがってそれらを教員が事前に用意して生徒に提供するにせよ、生徒自身に準備させるにせよ、それ相応の困難はあり、時間と労力を要することであるが、なすべきことはおおよそはっきりしているといえる。

史跡、名勝、施設、工場等の見学についても形は変わるが、同様のことがいえる。また海外提携校との生徒間交流については、交流の内容が多様であり、内容に応じて準備も指導の必要性や方法も変わってくる。しかし内容が決まれば、なすべき準備も指導もほぼ具体的に決まってくるという点では同じと考えられる。修学旅行については、これら様々の目的行事がいわばセット・メニューになっているのであり、準備と指導の種類が増加、要する時間と労力がふえるという点が異なるのみである。[注2)]

2. 海外研修の付属予定

海外研修には、以上に見てきた目的行事の外に、付属予定がともなうことは自明である。すでに述べたように本稿の問題意識は、この付属予定を海外研修における観察・体験学習、とくに社会科教育のそれとして企画、立案できないかということである。それにはこの付属予定の内容を明確にする必要があるが、性質上明瞭かつ包括的に定義することはむずかしい。ここでもその有力候補、具体例となりえると思うものを列挙してみたい。

1．都市中心部、繁華街での散策
2．商店、デパート、レストラン等での買い物、食事等
3．空港での出入国手続き、フライト搭乗手続き
4．現地公共交通機関（地下鉄、バス等）の利用
5．現地ホテル等での諸施設、サービス等の利用

このように見てくると、本稿でいう付属予定とは、あえて次のように要約できるかもしれない。海外研修において、訪問国、その社会、文化のありようについて、ふつう多くの生徒が経験し、観察することで、驚きとともに強い印象や記憶として残りうるものである。これらには、不特定多数の現地の人々との接触、コミュニケーションの機会を含む。訪問国の社会の実際との接触でもある。漠然とは、これらも「よい経験になる」、「よい勉強になる」、「よい思い出になる」との認識が持たれている。これらに関する失敗やしくじりについてさえ、ふつう肯定的に理解されている。ここに問題があるとすれば、ここから何を、どのように学ぶかが企画され、準備されることがほとんどないということである。われわれの主張は、ここに有力な学習機会、教育機会とくに社会科のそれがあるのではないかということである。そのように考える理由を以下三点あげておきたい。[注3)]

第一に、日常的に生活する日本社会について、その特徴や性質を実際の観察や体験を通して理解することはかえってむずかしいということがある。その点に関して、海外体験は暗黙のうちに比較という視点が加わるため有効であることはよく実感されることである。外国で改めて日本を、日本人であることを意識するという経験はしばしば指摘される。これを意識の自然な流れにまかせるのではなく、意図的、計画的に活用したいと考えるのである。

第二に、海外で過ごす時間には、誰れしも高揚感があり、それによって感受性が高められた状態にあることが多い。自分の日常体験するのとは全く違った世界に自分は今いる、多くのことが日常とは違っているという意識がいやおうなく感受性を高めている。これは生徒の社会観察・体験学習にとり好都合の条件下といえよう。海外研修から強い印象、豊かな思い出を得られずに帰ってくる生徒も実際にいるであろう。そういうことの得意な生徒もそうでない生徒もたしかにいようが、こうした観察・体験から有用な知識や感動を得る力は意図的に育成すべきものあって、そのための有効な機会と考える。

第三に、海外研修、外国の地では、制度、習慣が全く異なり、ことばによるコミュニケーションに大きな制約がある。このような条件の下で、生徒が自力で何事か達成しようとすれば、頼ることのできるのは、自分がすでに持っている知識や能力、勘だけである。それらを総動員するほかはない。そうして制約や困難を乗り越えて目的をとにかく達成するというのは生徒にとりきわめて貴重な体験であるが、付属予定の例としてあげたいくつかは、このような機会をごく自然に生徒にとって取り組みやすい形で提供してくれると考えられる。

Ⅲ．観察・体験からの学習

海外研修の付属予定における社会観察･体験から生徒に意図的に、計画的に学ばせるとして、そこに期待できる教育成果、学習効果とは何であろうか。それらが生徒の社会認識の育成や公民的資質の向上にどのように寄与しうるかをできるだけ具体的に検討してみたい。

1．認識力の育成

海外研修、その付属予定の部分における社会観察・体験は生徒の社会認識力の育成機会として大きな意義を持つとわれわれは考えている。社会認識は、自ら直接の社会観察・体験を契機として得られる場合と、今一つ書物

やメディアを通して得られることが多い。観察・体験を契機とする場合、実際に観察し、体験するのは、その社会のきわめて限られた一場面であり、その一つ一つは全体からすれば断片であり、極小部分にすぎない。これら観察･体験で得たものを社会認識にまで高めるには、これらに何らかの一般性や論理性を持たせたり、それらがその時々に持つ意味や意義まで理解する必要がある。そうした社会観察･体験が社会認識にまで高められたとき、それらは直接的、具体的、事実的であるがゆえの強いインパクトを持つ。他方、書物その他メディアを通して学ぶことは、個人が観察・体験を通して知ることより一般性、論理性が高いことが多いかもしれないが、抽象的、概念的であって、インパクトは必ずしも強くない。社会認識の育成には両方が必要である。そうした意味で社会認識を求めるうえで、観察・体験学習は一方の重要な役割を担いうる。しかも日常的に接し、見慣れている国内の現状、風景の下での観察・体験を上まわる効果を持ちうることはすでに述べたとおりである。[注 4)]

海外での観察･体験という点に注目すると、社会認識におけるさらに次の二つの視点を指摘することができる。第一には、海外現地で見るものと、それと同等、相当の日本のものとの間の違いを認識するという視点である。対応する二つの事象を比較してみるということは認識の方法として有効かつ一般的であるが、海外での観察･体験は自然にそうした機会を用意し、そうした方法を学ばせてくれる。具体的な一例をあげておくと、バスや地下鉄の料金の日本とその国での違いは、為替レートを通しての概算を要するが、ただちに実感するであろう。その金額の開きを知ることは一定の成果であるが、その開きが異様に大きいことも珍しくない。その理由や意味を考えるという方向に進めば、それは新たな認識、理解に進むことを意味する。

また、海外現地の事象に対しては、国内ですでに書物やメディアあるいは授業を通して一定の知識、イメージを持っていることが多い。しかし海外現地で実際を見ることで、両者の違い、すでに持っていた知識、イメージと海外現地の実際の差異に気づかされることがあろう。いわば概念と実際のずれを認識するというのが、第二の視点である。誰れしも海外現地の実際を見て、一般にいわれていること、そう思い込んでいたことのあまりの違いに驚いたという経験があるに違いない。こうした経験を重視することは認識における重要な側面である。

２．コミュニケーション能力の育成

コミュニケーション能力は公民的資質のうち重要な部分を占めると考えられるが、社会観察･体験は生徒のコミュニケーション能力練成の有力な機会と認められる。

海外現地でのコミュニケーション機会には特有の困難さをともなう。たとえば社会のルールや制度、習慣をよく知らないために、見知らぬ人にたずねなければならない機会が多くなる。その場合、(1) 語学力の制約があり、さらに(2) コミュニケーションを暗黙裡に助けてくれるお互いの共通知識、共通感覚も希薄である。(3) 生じてくる問題はその場、その場のもので、その時々に即応するほかなく、準備のむずかしいことが多い。(4) 相手は外国人という緊張感もある。これらはコミュニケーションを困難にする要因であるが、一方、コミュニケーション能力の練成という面から見た場合、これらが生徒に一定の負荷を与えて格好の学習機会を提供するものと考えることもできる。自分の今持てる能力だけで、当面必要なコミュニケーションを行わざるをえない、必要な情報を入手せざるをえないという教育機会がごく自然な形で提供され、そこでの成功体験は生徒の自信となる。

３．達成力の育成

達成力とは、判断力であり、実行力である。必要な知識がすべて揃っていれば、すべて実現可能というわけではない。何かを達成するには、必要な知識のうえに様々の判断の束、行動の束を成功裏に果たして行く必要がある。ただ、部分的に失敗があってもよいが、別の対応で補って、最終的な達成にもって行かなければならない。こうした達成力も生徒において向上させるべき公民的資質の重要な一つに違いない。しかしこのような資質育成の意図的な練習機会は自国での日常ではそう多くはない。あったとしても、そうした機会は容易に見過ごされ、回避されてしまう。海外現地で、行くべきところに行くべき時刻に無事に行く。必要なものを必要なだけ妥当な価格で買い整える。国内ではごく自然にできてしまうことに困難がともなうことが多い。コミュニケーション能力育成のケースと同様、こうした困難は達成力練成の場として見た場合、逆に一つの機会となろう。[注 5)]

また地図、時刻表、旅行ガイドブック等、あるいはこれらに関するインターネット情報などわれわれの日常の行動の助けとなる情報源は多い。海外現地で自ら行動せざるをえない場合、これらに頼らざるをえないケース、

活用できれば便利なケースが多い。実際に利用してその有用性や有能な利用法をごく自然に習得する機会でもある。

Ⅳ．海外観察・体験学習 ――指導プランの例示――

前節で要約したような目的意識に立って、海外での社会観察・体験学習の指導プランを具体的にどのように立案するかは、多様な形態がありうる。まず第一に、何を観察し、体験するか、これを全く自由に生徒にまかせ、ただそれらについての事後レポートを求めることだけを伝えておくもの、これを仮に自由形と呼んでおく。次いで、分野や焦点をある程度絞るためのメイン・テーマのみ与え、具体的に何をどう観察・体験するかは、生徒自身に判断させるもの、これを制約形と呼んでおく。さらにメイン・テーマ設定に加え、その下にある程度詳細な指示や課題を与え、これを通して観察・体験をいわば誘導する形のもの、これを誘導形と呼ぶことにする。ケースに応じて適切な形が選ばれるべきことはいうまでもないが、ここでは誘導形について、つまりメイン・テーマやその下での観察・体験のための詳細な指示、課題の具体例とそれらをあげる意図について述べたい。

１．メイン・テーマの設定

メイン・テーマや詳細な観察・体験課題といっても相対的、便宜的なものである。とりあえずメイン・テーマとは基本的に観察や体験を通して何を学ぶかを指すものとしよう。そのメイン・テーマの下での観察・体験の指示、課題とは、メイン・テーマについて学ぶために、具体的に何をどのように観察・体験するかを与えるものである。これは多くの小さな質問と指示の束になろう。まずどのようなメイン・テーマがありえるかについて考えたいが、海外における社会観察・体験学習の典型として考えられるのは、次のような例ではないだろうか。

(1) その国と日本との相違点

(2) その国と日本との関係

(3) その国自身の著しい特徴

(1) では制度や習慣、文化的な面で、その国と日本ではどのような違いがあるか、そのような違いをもたらす理由は何かなどを考えさせるという意図である。(2) では、政治、経済、文化その他について、一方が他方にどんな影響を与えているかを学ばせるということである。(3) はまさに文字通りである。

ここでメイン・テーマによって、あるいは次に検討する観察・体験課題に沿って何を学ぶか、あるいは何を見るか、どのように見るかについての指示、誘導を行う理由について述べておきたい。社会認識とくに認識力には、指示や誘導によるのではなく、自分でこれらを見つける力も含まれる。むしろこの力こそが求められるべきものともいえよう。しかしこうした力は社会認識力育成の最終目標に近いものであって、いささか困難をともなう高度の力ではないかと思う。年齢等生徒のレベルにもよるが、一定の観察・体験成果を期待するには、少なくともメイン・テーマ程度を、さらに多くの場合、具体的、詳細な観察・体験課題を与えておくのが妥当と考える。見つけるべきもの、さがすべきものが前もって与えられ、それらが確かにあると知ってさがすとき、見つけ、さがす作業はかなり容易となる。こうした成功体験、経験が見つけるべきものは何か、さがすべきものは何かということまで見つけ、さがすことのできる力を育ててゆくと考えるのが順当ではないだろうか。

２．観察・体験課題

次にメイン・テーマの下、生徒に提供するさらに具体的で詳細な観察・体験課題としてどういうものを考えているかを、具体例に沿って示してゆきたい。先にあげたメイン・テーマの例 (1)、(2)、(3) は、われわれの想定する社会観察・体験学習に関してある意味で典型的、一般的であると思われるが、こうしたメイン・テーマに即応する観察・体験課題として考案したものである。[注6)]

(1) メイン・ストリート、繁華街等において

ａ．広告・看板等

どのような業種の、どんな商品の企業の広告・看板、あるいはどの国のどんな業種のそれが多いか。とくに日本企業のそれはどうか。それらはその国の有力産業、有力企業が何であるか、日本との経済関係につ

いての示唆を含む。

b．街路を走る車

どの国の、どのメーカーの車、場合によってはどんな種類の車が多いか。日本車が多いか少ないか、これもその国と日本とのかなり微妙な関係まで示す。

c．商店の種類

どのような（何を売る）商店が多いか。一例として、書店が多い街、少ない街、全くない街があり、それは様々の意味でその国、その都市、その街の特徴をかなり正確に伝えてくれる。

d．街行く人のファッション

生活水準の一端やどの国の文化的影響を強く受けているか等が伺える。また、ブランド専門店の多い街とそうでない街、日本に多いブランドとの相違と類似など。ブランドの母国を含めて考えるとき、ブランドの意味を考える材料ともなる。あるいはその国民が好む独自の色調、色合いが伺える。

(2) 専門商店・スーパー・デパート・レストラン等において

a．どのような商品が多く並ぶか

店舗の種類に応じてではあるが、その品揃えの特徴がその国の興味深い特徴を伝えることがある。たとば、書店において、どのような分野の本が多く並ぶかは、その国の知的、文化的関心の向う方向を示している。さらに一例として、旅行ガイドブック、語学学習書について、その国で比較的強い関心が日本に対してもたれているならば、日本のガイドブック、日本語学習書が多くなるはずである。そうしたことについて一般に伝えられていることと実情の違いに気づくことも多い。

b．どの国からの輸入品が多く並ぶか

その国がどの国と密接な経済関係にあるかが伺える。

c．その国のユニークな商品は何か

食品やその他その国の良く知られた豊富な農産物は何か。あるいは織物や工芸品、その他、その国の著名な産物を実見する。

d．マクドナルド・ハンバーガーを食べる

よくあげられる例であるが、世界中で均質商品であるマクドナルド・ハンバーガー、それも一定の商品、たとえばビッグマックを食べさせてみる。現地価格を為替レートで円建換算したときの価格と日本での価格がどれほど近いか、もしそれに差があればそれが何を意味するかを考えてみるのは、為替レートや内外価格差の理解に有効である。これはマクドナルドに限らず、世界中にチェーン展開している他例、たとえばスターバックスなどでも同じことができるし、具体例の間の比較も面白い。また世界中で均一をめざしているはずのこれらの各店舗で微妙な違いがあることが、日本の店舗との違いで認識できる。

(3) ホテルその他諸施設において

a．テレビ

ホテル等現地の宿泊施設でテレビの放送を見ることがあろうが、番組内容はその国の国民の関心の方向、どの国の影響を相対的に強く受けているかなどがある程度現れる。とくに日本に対しどの程度、どのような関心を持っているかなど。またコマーシャルについても、その時その国の関心の商品が何かが伺い知れる。これらについてはその国のことばがほとんど、あるいは全く理解できなくてもある程度の知識が得られることがわかる。

b．新聞、雑誌

ホテルその他宿泊施設で目にすることのできる新聞、雑誌等から、上で述べたテレビ放送から伺い知れることとほぼ同等のことが知れる。とくにテレビや新聞といったメディアの報道姿勢の違いに気づくこともあろう。

(1)～(3)によって、総じてその訪問国がどの国とどのような強い結びつきを持っているか、あるいはその国民生活の特徴を経済的、文化的側面から伺い知ることができる。

３．何を体験させるか

極論すれば、外国現地のある目的地、一地点に一人で行かせるという体験は、先にすでに前節Ⅲで述べた意味で非常に有益な体験となると思われる。しかしこれにはかなりの危険がともなうので、かなりの準備と条件が整ったケースしか実施は期待できない。しかしこのような体験を分割、縮小して、実施可能なものにできることもある。そこでは体験だけでなく、それにともなう有効な観察も可能である。ただこの場合、意図するのは生徒自身に行動させ、体験させるということである。多くの場合、教員や現地の人達の同行が必要になろうが、その場合、現地現場での助言や手助けは最小限にとどめることが必要であろう。

(1) 公共交通機関において

目的地に行くのに鉄道、地下鉄、バス等、どの交通機関を利用するか、乗車券の購入、改札、乗るべき列車の選択、正しい駅での降車を身近な人の説明によるのではなく自分一人で方法を見つけ、実行して行くことが重要である。その体験とともに、多くの有益な観察も可能である。

ａ．料金体系の日本との違い

たとえば、いわゆる初乗り料金の日本との違いは興味深い情報となる。日本と比べて非常に高い所、安い所があり、その理由や意味を考えることはきわめて重要であるが、自発的に自然にそれを行う機会や材料を提供してくれる。

ｂ．券売・改札システムの日本との違い

システムの違いが興味深い。またこれらのシステム、機器がどの国のメーカーのものか、あるいはこのシステムだけでなく、車両、エスカレーター、エレベーター等のメーカーについてもその国と密接な関係ある国がどこであるかを示している。

ｃ．車内広告・車内放送

その国と密接な関係にある国やその国民性等を伺い知ることができる。車内での時間は長時間のことも、短時間のこともある。

そうした時間の過ごし方は、国によって大いに異なり、国情を伝えていて興味深い。

ｄ．車内の様子、乗車マナー

その国情、国民性を伺い知ることができる。

(2) 出入国、搭乗手続き

出入手続きは、ある意味では国家、国境について具体的に考えさせられる機会である。一人で体験させ、一連の手続きとその意味を確認させる。搭乗手続きについてもほぼ同様である。

(3) 地図・時刻表、旅行ガイドブック等の利用

先にも述べたが、はじめての場所、その都市の全体像、細部についてほとんど知らないところで、自力で行動する際、地図、時刻表、ガイドブックその他を利用することになる。これらを利用しつつ行動し、体験することで、これらの利用価値を体験できるとともに、利用する力を育てることができるのではないだろうか。地図についていえば、それを読む力、そこから必要な情報を引き出す力には、人によって大きな差がある。そうした力を育てるのには、それに頼らざるを得ない状況に身を置くことが有効である。

Ⅴ．おわりに

本稿でいう海外研修における付属予定の部分を社会観察･体験学習として企画、編成できないかということは、著者らが、勤務先学校の海外研修の引率に参加して実際に感じ、考えてきたことであった。また講演等で訪問した先の学校で質問として受けたことでもあった。こうした取り組みの必要性を認識する向きは、現在少なくないと思われる。今後一層増えてゆくと考えているが、著者らの乏しい予備知識の範囲では、先行研究に出会うこともほとんどなかった。そこでわれわれの現在の関心事、問題意識をとりあえず社会科教育への一つの提案という形でまとめたのが本稿である。この後、社会科教育において社会観察・体験学習がどのように位置づけられてきたかをさかのぼって検討すること、およびそうした位置づけの今後の発展の余地を検討したいと考えている。さらに本稿との関連で、以下の三点に関する必要性と可能性、方法の検討を課題と考えていることを付言して結び

にかえたい。

1）生徒各々の具体的な観察・体験から、より一般的な社会認識への形成過程の考察。
2）海外研修だけでなく、国内研修旅行の社会観察・体験学習として拡充、企画、編成。
3）社会科学習としてのアイデアに富んだ多様で、安全な体験学習の考案。

注

(1) これらの具体例は、各校の入学者募集用のパンフレット等でしばしば見られる。魅力的な海外研修プログラムは生徒募集の手段となりつつある現状が伺える。

(2) 詳細な説明のある旅行ガイドブックは多数出版されていることはいうまでもない。有名な美術館、劇場、史跡、名称等に関するものは簡易本から豪華本に至るまで夥しい。施設、工場等については、それら当局から事前の資料、情報提供が受けられる。総じてインターネットを通じて広範に、詳しい情報が容易に得られる。そのほか意外な有益情報の得られる書物として、野口（2003)、いささか古いが林（1987）がある。

(3) 海外研修の付属予定の部分での観察・体験学習を通して習得しようとしている類いの事柄を、目的行事を通じて習得するということは勿論ありえる。たとえば美術館や劇場、訪問先の工場や施設でのことが、ここでいう社会観察・体験学習にもなれば、それはそれで高く評価すべきことである。

(4) 経済の現状認識や景気判断に関しては、広範で精緻かつ体系的な経済統計が利用可能である。それにもかかわらず、現場の観察の重要性はしばしば指摘され、実際に利用される。たとえば伊藤ほか（編）(1996)（p. 194）を参照。この場合も問題はそこで得たことにどのように一般性、論理性を持たせるかである。

(5) 中学生（場合によっては高校生も含め）に国内の今いるところから、海外のある地点に、ある日時までに一人だけで到着させるという課題は、成功裏に実施できれば、習得することが多いすぐれた体験学習になるように思える。問題はそれにともなう生徒の危険をどう回避するかである。

(6) 理論的分析、統計的分析、歴史的分析をどれほど積み上げても、その成果がわれわれの経済実感と完全には合致しないことは多い。そのため経済の実際、たとえば繁華街や盛り場、人の集まるところを観察することの重要性はしばしば指摘されてきた。その場合、いささか旧聞に属するが、有効な方法、要領を提示して一世を風靡したものに竹内（1993ａ）（1993ｂ）がある。本稿のここでの目的にも役立つと思われる。

参考文献

(1) 伊藤元重ほか（編）(1996)『日本経済事典』日本経済新聞社
(2) 竹内宏（1983ａ）『路地裏の経済学』新潮文庫
(3) 竹内宏（1983ｂ）『続・路地裏の経済学』新潮文庫
(4) 野口悠紀雄（2003)『「超」旅行法』新潮文庫
(5) 林周二（1989)『比較旅行術』中公新書